第七十九番上不見山浄土王院（真言宗高野山派）

するがなる富士をば安芸に引きかえて 上見ぬ鷲の山のとうとき

仰ぎみる極楽寺山、観音本堂と同じ境内に昭和５４年阿弥陀堂が新しく建てられ浄土王院と称せられることになった。昭和５９年盛大な落慶法要が行なわれた。

本尊はヒメコマツの寄木造りで、高さは台座を入れて８ｍ、横５.５ｍ、重さ２.５ｔの阿弥陀仏座像である。つい先年までは日本一大きい木造仏であった。現代の名仏師松本明慶氏の作である。

極楽寺が上不見山浄土王院という山号と院号を贈られたのは、久寿年間(１１５４年頃)である。鳥羽上皇の御信仰厚く、佐藤則清(西行法師法名円位)は使者として山号額を捧持して登山し、この和歌を詠じて宝殿に懸け給うと、極楽寺本尊略縁起という古書が伝える。

上見ぬ鷲とは、鷲は舞う時に下を見下ろすばかりであるから、この山より高い尊い山はないの意で、釈迦の聖地霊鷲山をふまえている。

仁平２年(１１５２)平清盛が厳島社殿を修築しているが、その２年か３年後、西行法師がその歌集「山家集」に安芸の国一の宮へまいりける歌二首を詠んでいるから関係があると思われる。

第七十九番は、以前広島市西区庚午北の正清院(浄土宗)であったが平成５年、本尊が同じ阿弥陀如来である当院へ変更された。

浄　土　王　院